

医

名古屋大医学部  
150年  
を拓く

人体の内部を輪切り状態で見るコンピューター断層撮影(CT)。脳や肝臓などの病気、けがのほか、新型コロナウイルス感染症で入院が必要な患者の肺の状態を確認するためにも活用される、なくてはならない技術だ。

その礎を開発したのが、名古屋大放射線医学講座の初代教授である高橋信次。「CTの開発は二十世紀の医学界で最大の功績とされる。元となる技術をついた意義は非常



高橋信次＝名大付属図書館医学部分館提供

たかはし・しんじ(1912~85年) 県二本松市生まれ、東北帝国大医学部卒。54年から名古屋大医学部放射線医学講座の初代教授、80年愛知県がんセンター総長。58年中日文化賞、77年日本学士院賞、84年文化勲章。すぎた・けんいちろう(1932~94年) 名古屋市瑞穂区出身。信州大教授などを経て、88年に名古屋大脳神経外科教授、93年に名大病院長を兼任。84年、スカンディナビア王立脳神経外科学会オリベクローナ賞。91年に中日文化賞。

## ④ 高橋 信次、杉田 虚一郎

に大きい」と、同講座の教授の座を受け継ぐ長繩慎二教授は語る。

高橋が東北帝國大放射線医学教室に入った一九三八年当

時、人体内部の撮影はエックス線が主流だったが、一つの方向からの撮影しかできず、病巣の確認には限界があつた。

高橋は、患者を回転させさまざまな角度から人体の輪切り画像を撮影し、より正確に人体の内部を確認できる「回転撮影法」などの手法を発案する。四四年ごろから病床に

くも膜下出血を引き起す脳内の血管にできた塊「脳動脈瘤」の外科手術に使われ

り、患者の負担が過大になってしまふ」と、長繩さんは功績の偉大さを訴える。

「CTのように体の中を見

るすべが現代になかつたら、病巣の位置や大きさが分からず手術を繰り返すことになり、患者の負担が過大になつてしまふ」と、長繩さんは功

とを抑える。

七六年、名大医学部教授の杉田虚一郎が、医療機器メー

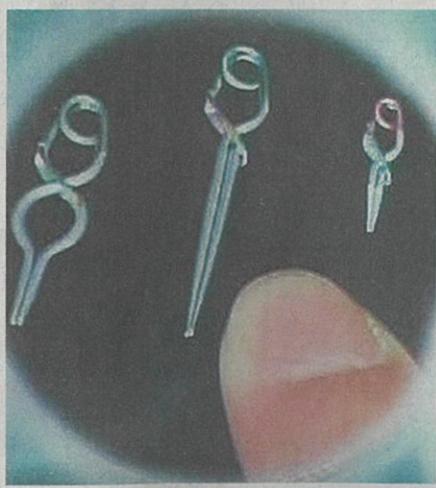
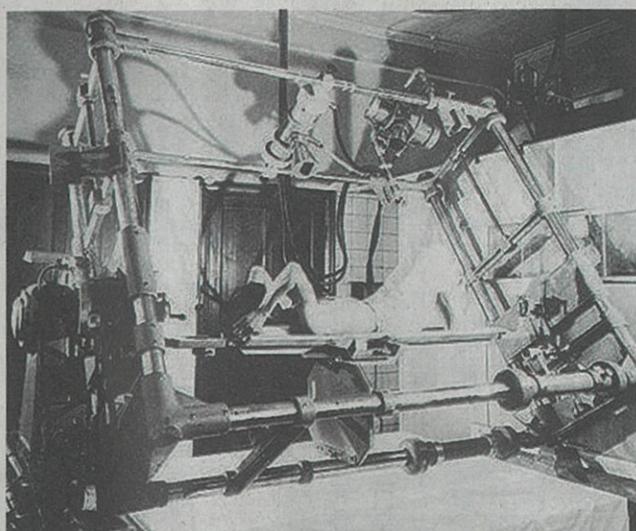
カー・瑞穂医科工業(現ミズホ、東京)と完成させた。脳

内筒形の茶筒を人体に見立てる輪切り状態での撮影がで

きないかを考えたことがきっかけだ。

「CTのように体の中を見

るすべてが現代になかつたら、病巣の位置や大きさが分からず手術を繰り返すことになり、患者の負担が過大になつてしまふ」と、長繩さんは功



杉田虚一郎＝名大付属図書館医学部分館提供



杉田虚一郎＝名大付属図書館医学部分館提供

# 開発技術で今も患者救う

て、輪切り状態での撮影がで

きないかを考えたことがきつ

つかけだ。

る、杉田クリップという医療器具がある。動脈瘤と血管が

つながった部分を専用の鉗子

ホルムベージから

動脈瘤の手術法はほかに、微

細なコイルを動脈瘤内に詰め

込む方法、極小の管を血管内

に通す方法があるが、杉田クリップは半世紀近くたった今

リップは半世紀近くたった今

も世界中で使われている。

杉田はクリップ以外にも、

手術中に担当医と助手二人が

同時に患部を見られる顕微

鏡、足元のペダルで手術台の

高さを変えられる装置も考案

した。杉田を直接知る同社の

田中博朗さん(63)は「杉田先

生は、どんな医師が使っても

高い効果を出せる器具があれ

ば、より多くの患者を救うこ

とにつながるという信念を持

つっていた」と明かす。

杉田は胃がんのため、六十一年の若さで一生を終えた。杉田の名大医学部教授時代の助教授で、亡くなるまで杉田と交流があった渋谷正人・中京病院元院長(77)は「がんが見つかったと知らされた時は、本当に泣けた。杉田クリップで多くの人を救った杉田先生は、名大医学部の初期に基礎を築いた後藤新平に匹敵する人物だ」と話した。

上高橋が考案した、回転式の撮影装置＝名大医学

下杉田が開発した「杉田クリップ」。大きさ1~2cmを中心多く種類がある＝ミズホ提供